

# 入試改革カルテ

## 佐賀大学

### アドミッションポリシー【全学】

佐賀大学は、学生と緊密にコミュニケーションできる総合大学として、人格形成、専門知識・技術の修得、そして基礎から実用開発にいたるまで、能力を最大限に伸ばすことを目標に人材育成と研究活動を展開します。

佐賀大学の教育目標は、高度情報化社会で活躍できる情報基礎と専門知識を修得させること、地域文化を理解し地域に根ざした活動を行うための素養を持たせること、国際化時代にふさわしい異文化理解とコミュニケーション能力を修得させることです。

佐賀大学は、チャレンジ精神を持ち、問題を自発的に探求・解明し、社会に貢献できることを人生目標とする学生を求めています。



▶1949年佐賀大学、1976年佐賀医科大学開学。2003年両大学が統合▶6学部17学科・課程。学生数は約7000人▶THE世界大学ランキング日本版2017総合順位63位

### 背景と取り組み

背景	取り組み	指標
<ul style="list-style-type: none"> <li>▶高大接続を意識した入試設計・取り組み</li> <li>▶ペーパーテストの技術的限界の克服</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶継続・育成型高大連携カリキュラムの実施「教師へのとびら」(2014年度～)、「科学へのとびら」(2016年度～)、「医療人へのとびら」(2017年度予定)</li> <li>▶新設された芸術地域デザイン学部の入試設計(2016年度入試～)・高校時代の活動や実績を評価する「特色加点」の導入</li> <li>・「問題解決・提案力テスト」の実施</li> <li>▶デジタル技術を用いたテスト開発「佐賀大学版CBT」(2018年度入試～)</li> </ul>	<p>指標および数値目標は特に設けていない。</p>
<b>APとの整合性</b>	2017年度にAPを改訂。入試と学力の3要素との関係を表形式で説明。「入学志願者に求められる学習の取り組み」の欄を設けて、高校での学習と大学での学びのつながりを説明。	
<b>多面的・総合的評価</b>	面接、小論文などに加え、主体性・多様性・協働性を評価する「特色加点」、主に思考力・判断力・表現力を評価する「問題解決・提案力テスト」「佐賀大学版CBT(2018年度入試より)」を開発	
<b>英語4技能</b>	2018年度入試から、全学部の一般入試(前期・後期)で外部検定試験を利用(センター得点に換算)	
<b>入学前教育</b>	複数回のスクーリングや専門分野に関するレポート課題 理工学部ではeラーニングを導入	

### プロセスとスケジュール

年度	2007	～	2012	2013	2014	2015	2016	2017	～	2020	
ステップ	入試改革・高大接続方法の模索					入試改革事業の実施・検証→拡大					全学部展開
学内体制・学内の動き	▶アドミッションセンター設置		▶学長が約50校の高校を訪問(～2014) ▶学長中心に、入試改革の検討開始(2013)			▶学長直下に、入試改革推進室を設置					
入試制度					▶「教師へのとびら」スタート	▶芸術地域デザイン学部新設でアドミッションセンターが入試設計を全面支援	▶「科学へのとびら」スタート	▶佐賀大学版CBT(推薦入試)実施予定 ▶「医療人へのとびら」スタート予定 ▶外部英語検定を全学部の一般入試に導入		▶佐賀大学版CBTと特色加点を全学部で実施予定	

How to

# 高大接続

↓入試対策を前提に設計

## 佐賀大学

佐賀大学では、「佐賀大学版CBT」「特色加点」「継続・育成型高大連携活動」の3事業を柱に入試改革に取り組んでいる。事業の背景などについて話を聞いた。



アドミッションセンター 教授  
インスティテュショナル・リサーチ室長  
**西郡大**  
にしごりだい●2000年早稲田大学教育学部卒業。民間企業を経て、2009年東北大学大学院教育情報学教育部博士課程後期修了。同年佐賀大学アドミッションセンター准教授。2012年からインスティテュショナル・リサーチ室長を兼務。2016年教授。

### 入試改革の柱となる3つの事業

本学では、3つの事業を柱に入試改革に取り組んでいます。1つ目は、「佐賀大学版CBT」です。ペーパーテストだと技術的に評価が難しい能力があります。これを、基礎的なデジタル技術を活用したCBTで補完する試みです。例えば、CBTでは即時採点が可能ですが、20問の基本的な問題を解かせて即時採点し、間違った問題については解説を提示します。この解説を理解して次に出現する類似問題が解ければ、一定の「学習力」を評価できます。推薦入試やAO入試などの受験者は多様な学習履歴を持っていきます。彼らに共通して求める基礎学力と学習力を評価したいと考えています。

これは、アドミッションポリシーを踏まえて、受験生が高校時代の活動や実績について記載した申請書を加点方式で評価する制度です。申請書の提出は自由で、申請があれば加点し、なければ0点の扱いです。特色加点の狙いは、合格ボーダーライン付近の受験生の合否を、数点の違いで決めるのではなく、違った側面からの評価も考慮し判断することにあります。加えて、アドミッションポリシーに対する受験生の理解度が高まることも期待しています。

3つ目は、「継続・育成型高大連携活動」です。これは高校生が自分の希望進路について、大学教員の講義や参加者とのディスカッションを通して理解を深めていく高大連携カリキュラムで、高校3年間を通じた計7回のプログラムで構成されています。この取り組み

### 期待する高校での学びを入試の中に織り込む

これらの取り組みに共通することは、本学が受験生に期待する高校での学びを各事業の中に盛り込んでいく点です。つまり、高校での対策を前提に企画を考えているのです。

「佐賀大学版CBT」で、化学の実験プロセスに関する問題を動画で出題すれば、高校では問題文に書かれた実験過程を読み解く演習ではなく、実際に実験を行うことを重視した授業をするようになるでしょう。「特色加点」は、受験生にアドミッションポリシーを自分事として考えることを促します。「継続・育成型高大連携活動」では、実体験や仲間との議論を通して志望動機を練り上げる機会を提供しています。

入試に対して高校側が対策をとることは、必然なことだと言えます。そのため大学は、高校での入試対策を前提に、創意工夫を凝らし、高校での学びに期待することを入試の中に織り込む努力をすべきです。大学がそうした努力をすることで、本当の意味での高大接続が実現すると考えています。